

実践報告

社会人経験をもつ学生への指導から得られたこと

—— 授業実践報告から ——

久保田 武

この実践報告は、2006年度後期に私が担当した科目「教職への社会人経験適応演習」を取り上げ、この科目の意義、授業構成、授業実践内容、そして受講生が書いたレポート・コメントの要旨とこの科目でまとめた全員の小論「自己の社会人経験を教職に生かす方策」から私が帰納した内容から構成されている。帰納した結論によれば、社会人経験をもつ学生は、多くの点でその経験がない学生より教員として優れた資質を備えている。しかし問題がない訳ではない。それはなぜか、またどうすればその問題を克服して社会人経験教員を学校現場で組織的に活かせるか。これらの点についてもこの実践報告の終わりで触れてある。

キーワード：社会人経験教員、ストレート教員、教育改革、教育現場

1. 本学の性格とこの科目が果たすべき役割と意義

いま、地域社会の人々や現在学校に生徒を通わせている保護者の間で、社会人経験がある教員を待望する空気が広まっている。そしてこの声は、学校の管理職、行政担当者、有識者に影響を及ぼしている^{1) 2)}。にもかかわらず、公立学校教員採用者の中で社会人経験者の比率はまだ10%前後にすぎない。全国の教育委員会は、団塊世代の大量退職を控え、教員の採用年齢制限を引き上げたり撤廃するだけでなく、社会人特別選考枠を設ける委員会も出てきた³⁾。

本学はそのような要望に応えるためもあって、2006年4月に開設された教員養成専門職大学院第1号の学校であり、入学生は全員社会人経験と教員免許状を持っている（但し2008年度からは条件付で学部新卒を受け入れることになった）。このように社会人経験者を求める声に関係各方面にあることは誰もが認めることだが、その論拠として取り上げられるのは、常識論・経験論、そして世論調査によるものが多く、説得力がある文献または調査をいまだ見つけていない⁴⁾。

このような状況の中、著者は当初社会人経験者を入学条件とした本学でこの科目を担当することになった。今のところ日本中の大学および大学院で、このような科目を開講しているところを筆者は知らない。そうした状況もあり著者自身初年度のシラバスは、受講生の人数を知ってから手探りで決めただいである。このような経緯で授業を始めたが、終わってみるとある一定の知見が得ら

れたので、これを実践報告としてまとめることにした。

2. 授業構成の枠組み

(1) 授業実施にあたっての基本原則

- ① 学生が授業の主役を演じる時間にする。
- ② お互いに情報交換ができる時間にする。
- ③ お互いに切磋琢磨する時間にする。
- ④ 他人の社会人体験から学ぶ時間にする。
- ⑤ 教師は原則として助言者になる。
- ⑥ 教師自身は学生の報告から実社会を学ぶ心がけで授業に臨む。

(2) 授業構成のメインフレームとサブフレーム

選択した受講生は8名（但し合格まで小論の添削を続けた学生は7名）。後期授業時数は15コマ（1コマは90分授業）であったので、授業のメインフレームとサブフレームは次のようにした。

「メインフレーム」

- ① 学生は、自己の社会人経験を原則として1コマで2名ずつ報告し、報告要旨（レポート）と資料を教師に提出する。
- ② 次に学生は、自分で選んだ尊敬または高く評価する社会人または経営体を原則として1コマ2名ずつ①と同様に報告する。報告要旨（レポート）と資料の提出は①に同じ。
- ③ 学生は、上記①、②の授業終了後、①での報告内容を修正加筆し、レポート「自己の社会人体験を教職に生かす方策」を教師に提出する。担当教師は各人のレポートを合格まで添削、学生はそれを参考に書き直しを繰り返し、最終レポートを小論として完成、教師に提出した。

「サブフレーム」

- ① 最初の授業ではオリエンテーション、自己紹介、授業への希望聴取などを行う。
- ② 次いで担当教師の社会人体験談、ストレート教員が大多数を占める学校現場の状況紹介、教員採用試験論文演習を経てメインフレームの学習を開始。
- ③ メインフレーム学習の合間に、都立高校の民間人校長第1号となったつばさ高校を訪問して山上校長の講義を受講し、社会人経験の生かし方などを学んだ。またフリースクール第1号の東京シューレ校を訪問し、奥地校長とスタッフから講義を受け、不登校といじめ問題を中心に学習と意見交換を行った。

(3) メインフレームの内容

- ① 学生一人ひとりの職場体験報告の授業

学生の前職は、市役所職員、出版社編集社員、システムエンジニア、インテリア会社営業職、フィットネス・クラブのフロントと法律事務所事務職、化学会社技術営業職、学習塾専任講師、私立中高校兼学習塾講師である。

授業では一人15～30分程度仕事の内容を報告し、それに対し全員が質疑応答と意見交換をし、終わりに教師がコメントをして報告内容を全員にシェアするのが標準的な授業の流れである。報告に当たった学生には報告要旨（レポート）と資料を全員に配布させ、教師が報告要旨を添削し学生に返すことにした。なお彼らの報告を土台にして「自己の社会人体験を教職に活かす方策」を小論にまとめさせたことは、「メインフレーム」の③ですでに触れた。なお学生の小論の要旨はこの報告の3. に掲載してある。

② 学生が選んだ尊敬する社会人または高く評価する企業体を報告する授業

学生が尊敬または高く評価する社会人あるいは企業体を、学生一人ひとりが選び、(1)の場合と同じ要領で報告をする第二ラウンドに移行した。学生が選定した対象は、松下幸之助、本田宗一郎のように偉大な企業人から、逢坂誠二（前ニセコ町長）、松浦元男（樹研工業社長）のように知人ぞ知る仕事をしている人、構造改革で大活躍した竹中平蔵、また企業体では、ディズニーランドとP&G（花王のモデルになった米国企業、化粧品他日用雑貨を販売する多国籍企業）、そして洋服の青山であった。なお学生が提出した報告要旨（レポート）の中から3つを選び、この報告の4. (2) ⑤⑥にその要旨を資料として掲載してある。

(4) 「自己の社会人体験を教職に活かす方策」を小論にまとめる

2月始めの最後の授業で、学生全員が、(1)で報告した内容、即ち学生自身の社会体験報告、を加筆・修正し、「自己の社会人体験を教職に活かす方策」としてまとめたものを一人ずつ報告し、互いにコメントを交換させた。その上で著者と学生の間で加筆と修正作業が合格するまで繰り返されたが、このことには2. (2)、③で触れている。なおこの加筆・修正作業にあたり次のような大原則を立てた。即ち、学生は、彼らの原稿に私が加えた添削を参考にして自ら書き直し、私の添削どおりの修正を強要しなかった。また添削する対象は、誤字、脱字は当然として、最も重視したのは一読して読者が意味を理解できる文かどうか、もう一つは引用文献・資料の吟味が理にかなない、確かな根拠に立脚して論旨を展開しているかであった。

最後に、学生一人ひとりが最後にまとめたこの小論「自己の社会人体験を教職で如何に活かすか」の要旨を、指導教員の呼びかけに応じて何人かの学生が寄せた「受講前後の考え方の変化」と、受講中に学生が提出した「各種報告要旨（レポート）や討論内容」と合わせ、私のまとめの資料にすることにした。

3. 学生の小論・コメントの要約とそこから抽出した推論

(1) 自分たちの社会経験を教職で如何に活かすか—要旨の掲載

① 学生Aの小論要旨

市役所時代、社会の活動を下支えする仕組みを学び、幅広い分野で活動する実に多くの人々と仕事をして知己になれた。この財産を活かし公民科教員になれたなら、例えばロールプレイ方式による模擬地方選挙、税金の使われ方と教育の関係、地域の人々とのコーディネート、教科書学習から行動へのブレークダウンなどを題材に取り上げ生徒を指導したい。

② 学生Bの小論要旨

編集者の経験を活かし、読み書き話すという基礎力の育成と英語と国語のコラボレーション、そして仕事は完成するまで責任を持つ姿勢が大切であることを教えたい。

③ 学生Cの小論要旨

SEとして働いた情報処理能力を活かしつつ、多様な経験と交流に培われたコミュニケーション能力によって、教育現場改革の旗手となれるよう努力したい。

④ 学生Dの小論要旨

大手学習塾専任講師経験から、授業のプレゼン能力、保護者・生徒を顧客とみる視点、自己を売れる商品とするための差別化、同僚との協調の中で自己を活かす方策を武器に教育界で働きたい。

⑤ 学生Eの小論要旨

技術営業職の経験から、自分で考え行動すること、自分の発言・行動に責任を持つこと、迷った時は思い切って挑戦すること、の三点を柱にして自分の社会人体験を折に触れて話しながら生徒指導に臨みたい。

⑥ 学生Fの小論要旨

会社、顧客、製造工場職人を結ぶ営業職勤務から私が得た強みは、大人の常識を持ち、保護者、同僚などとのコミュニケーション力があり、新知識・企画導入や顧客（保護者・生徒）満足度に抵抗感がないことである。教職では、これらの経験を活かす所存である。

⑦ 学生Gの小論要旨

フィットネス・クラブのフロント業務と法律事務所事務職の経験から、人の話をよく聞くこと、スケジュールをしっかりと組むこと、そして自分一人で決めてはいけない問題があることを学んだ。この経験を忘れることなく新しい課題に向けて挑戦したい。

(2) 学生の授業受講前後の変化—学生のコメントから作成

① 学生Aのコメント要旨

「社会人経験教職適応演習」を受講したことで、自分の社会人経験の教職への活かし方について、以前より分かりやすく伝えることができるようになった。表現の仕方だけでなく、自分の頭の中で

すっきり整理ができ、具体的手法についてもより明確に見えるようになった。短くかつ相手に分かるように説明できるようになったことは、教員採用試験の志願書や面接でおおいに役に立った。社会人経験は、教職の大きな武器になりうる。しかし、剣さばきを身につけても、刀を研がなければ武器として使えない。教壇に立つまでに、もっと使いこなせるよう自己研鑽を積んでいく所存である。

② 学生Bのコメント要旨

本講義を受講したことの効用は、次の三点に集約される。

- a. 他の学生との活発な意見交換を通じて、「社会人経験の活用」について、幅広い知識と視野を獲得できたこと
- b. 指導教員から受けた懇切丁寧な添削のおかげで、自らの文章を何度も推敲し、「自分なりの社会人経験」を深く省察することができた。
- c. 結果として、学校現場において、自らの社会人経験をどう活用するか？という点に関し、具体的な方略を得ることができた。

4. 著者のまとめ—授業中の報告・討論・提出されたレポートおよび学生の小論添削を通して帰納的に作成

(1) 社会人経験者に教職で今求められているスキル・特質—いわゆるストレート教員と比べて

- ① 保護者、生徒を顧客としてみるのが抵抗感なくできる。卑屈になったり機嫌をとったりしない限り、この視点は大切である。
- ② 保護者、生徒、同僚、地域関係者とのコミュニケーション力に優れ、またその重要性をよく理解している。
- ③ 職業人として必要な常識を最初にきちんと教育されており、保護者、生徒、地域関係者に信頼感を与えられる。
- ④ ストレート教員の間根強い抵抗感がある業績に対する上司の評定の必要性を理解している。上司、先輩の注意、叱責にも免疫がある。
- ⑤ 新しい企画、手法などの導入を経験しているため、改革への抵抗感が少ない。むしろ積極的に挑戦する気持ちを持っている者が多い。
- ⑥ 教育現場以外に知人、友人などの情報ネットワークが多く、経験と合わせて視野が広い。培った人脈の協力を得られれば多彩な教育活動が期待できる。
- ⑦ 組織・社会でのコンプライアンスの必要性や順拠への基本的態度を体得し、学校の指導者のリーダーシップに理解がある。
- ⑧ それぞれの職場で教育現場で職務遂行上必要な幅広い技法、知識を修得している。
- ⑨ 多くの場合、職場で厳しい仕事、辛い経験、理不尽な仕打ちなどを体験・克服している。

- ⑩ 多くの場合、教職への志望動機が、ストレートで教職に就いた教員より強い。

(2) 学生がこの授業で得たもの、変わったこと

- ① 第三者である生徒や保護者、同僚に、自分の考えや意見を分かりやすくかつ簡潔に伝えられるようになり、教員採用試験の面接や志願書作成の際役立った。このことは学習指導、生活指導、父母面談などでも必要条件である。
- ② 自分の社会人経験を教職に適応する方策を具体的に絞り込めるようになった。
- ③ 他の学生と異なる社会人体験を伝え合い意見交換することによって、大いに啓発され勉強になった。それまでは自分の社会人経験の活かし方を自分の側から考えていたが、生徒、保護者のニーズに応える立場で考えられるようになった。
- ④ 書くべき題意、話すべきテーマに正対する書き方、話し方がかなり理解できるようになった。
- ⑤ 優れた先人たちが見るべき実績を残した背景には、幾多の困難を克服した強靱な精神力と創意工夫、そして経歴、人脈、家族の助けがあったことを、自分と他の学生が調べたさまざまな事例研究から学び合い、教職に就いたときの心の支えと行動の指針が得られた。またなすべき価値ある仕事は、組織の大小や公私の別に関係なくどこにでも存在することを知り、学校もその一つであることを改めて確認できた。なお補足資料として、学生B（日本樹研松浦社長）と学生C（竹中平蔵教授）が授業中に報告後提出したレポートの要旨をつけ加えておく。

「学生Bのレポート要旨」：樹研工業創業者松浦元男社長（2002年世界最小最軽量の歯車100万分の1グラムを完成）から学んだことはたくさんある。「常に先回りが技術競争に勝つコツ」もそのひとつ。顧客からの注文を待つのでなくニーズの先を読む先見性である。教育現場でも生徒や保護者のクレームを待つのでなく、先を読んで準備対応する姿勢、アクティブな姿勢の必要性を知った。

「他社にはできない仕事をしよう」という旗印の下超微細歯車を完成させ、従業員70名の小企業に世界中から注文が殺到したことにも感嘆。教育現場でも生徒を満足させ、感動を与えられる授業力、生活指導力を磨く必要性を改めて実感した。またその独創的な人事管理風土から、高校時代の番長、元ニートの青年が技術開発の尖兵に成長している。教職現場でも問題を抱えた生徒の隠れた資質を引き出す努力と知恵の重要性を学んだ。

「学生Cのレポート要旨」：想像を絶する困難を克服し金融再生を達成した竹中平蔵慶応大学教授の事例研究から学んだこともたくさんあった。要約すると学校の組織や取り巻く環境を把握し最大限に利用する、評論家でなく実践家になる、ボス（校長）の方針を把握し必要に応じて自分の仕事に対する見解を質す、学校での意思決定手順を把握しプロセスのキーマンのコミットメントを取り付ける、同僚と外部そして個人的な味方を作る、そして最後まで諦めない、などである。

- ⑥ 現在注目されている企業や自治体の成果の裏には、危機を好機と捉える柔軟な視点やあくことなき創意工夫と改革の追及、そして独創的な人事管理があることを、自分と他の学生が調べた事例研究から学び、小さいながらも組織体の一つである学校の一員になった時、学校経営の視

点を備えて働く心構えの形成に役に立った。なお学生 D (ディズニーランド) が授業中に報告後提出したレポートの要旨を関連する資料として付け加えておく。

「学生Dのレポート要旨」:ディズニーランドの経営から学んだことは、訪問客を集めるためのポリシーの徹底。安全対策と挨拶・礼儀を重視し、ショーでは毎日が初演(ダンサーは毎年オーディション)という姿勢は、観客に楽しみと感動を与えリピーターを増やしている。学校が生徒・保護者に対する姿勢もこうでなければならぬ。どれだけ相手の気持ちになれるか、相手の立場に立てるか、で教育効果の浸透度が大きく変わる。ディズニーランドの徹底したサービス精神を学校現場に広めたい。

5. 終わりに — 結論に代えて

これまで考察してきたことから、一般的に、社会人を経験した学生は、教員として様々な点でストレート学生が持たない優れた資質を備えていることが分かった。しかしともすれば改革に消極的な教育現場では、必ずしも手放しで社会人経験者を評価してはいない。2007年、東京都の某区教育委員会指導室長は、他の条件が同じならばストレート学生を採用する動きが出てきたと話してくれた。その理由として、社会人経験教員の中に、職場の多数を占めているストレート教員の欠点が目につくあまり、性急に批判したり、改革を急ごうとして人間関係を悪化させ職場で浮いてしまう事例が目立ってきたことをあげている。したがって社会人経験教員も、学校の保守的体質を批判するだけでは問題解決にならない。まずは赴任した学校で管理職や先輩教員と一緒に働き、さすが社会人経験教員だと言われる実績を積んでから、その持ち味を活かした学校改革を提案、実践する必要がある。また教育行政機関も、短期的に判断せず、長い目で社会人経験教員の有効活用を図って欲しいと思う。それが教育現場に内部から改革できる人材を送り込むことになるのだから。

注

- 1) 内閣府の学校制度に関する保護者アンケート調査結果の概要(2006.11.24.発表)「教員の質を維持・向上させるために必要な施設(複数回答)では、教職以外の社会経験ある教員を増やすが56.4%、指導力がある教員を優遇するが47.7%と続いた。このような結果は、同じ調査で学力向上では塾・予備校が優るが70.1%(学校は4.3%)、現在子どもが通っている学校の教員に満足が27.3%(不満が28.4%)という現実が反映しているように思われる。
- 2) 教育改革国民会議中間報告提言より「非常勤、有期教員、社会人教員など雇用形態を多様化する。」「学校は、社会人がその職業体験や人生経験を生かし、学校教育に積極的に参加する機会を積極的に作る。」平成12年9月22日。さらに教育再生会議第1次報告(2007.1.24)でまとめられた7つの提言の4番目、「あらゆる手だてを総動員し、魅力的で尊敬される先生を育てる」の筆頭に「社会の多様な分野から優れた人物を積極的かつ大量に採用する」とある。また同じ報告の5番目の提言「保護者や地域の信頼に真に応える学校にする」の中で「優れた民間人を校長などの管理職に外部から登用する」とあるのも社会人経験者受け入れ要望の現れである。

- 3) 例えば東京都教育委員会では45歳を上限とする社会人特別選考枠を設け、小学校教員では採用人員の約10%を当てている。他県でも事例は広がっている。
- 4) 日本教育学会の学会誌「教育学研究」をみると1986年と1991年に教員養成問題または採用・研修を集中的に取り上げているが、私が調べた限りでは、社会人経験者と教員の関係に触れた論文はない。但し外国の文献で取り上げたものがあるかどうかは、まだ調べていない。

謝辞

終わりにこの報告をまとめるにあたり、数々の有益な助言と指摘を頂いた日本教育大学院大学の藤永保学長と林義樹教授に、心より御礼申し上げるとともに、小論とコメントの要旨の引用を許諾した7名の院生、田口浩明、小出孝光、川口浩司、望月利宣、上原史嗣、養田智也、石附敦子の諸君に対し、この場で感謝の意を表したい。

Practice-based Report

Seminar to Train Students of Non-Teaching Careers to Become Professional Teachers:

What the Students Learnt and the Reasons Why They Are in Demand at Schools Now

Kubota, Takeshi

This paper is one of the author's seminar records from October 2006 to March 2007. The aim of this seminar is to help students of non-teaching careers become professional teachers. Another aim is to find out the reasons why the teachers from non-teaching careers are in demand at schools now. At the end of this seminar, each student wrote a report entitled, "My plan to make use of my non-teaching career in the teaching profession." From their reports and discussions in classes, I found out that the students of non-teaching careers were probably much more qualified to become teachers than those students of direct entry in terms of challenging spirit, communication ability, etc. Therefore, I hope that the School Boards will continue to recruit them even though they have some minor problems, because without their participation, it will be hopeless, I think, for today's conventional schools to change.

Key words: teachers from non-teaching careers, teachers of direct entry, education reform, education sites
